

2017/12

リサーチ

No.127

通巻
184

平成29年12月25日

発行者
北海道公民館協会
会長川上満
〒060-0002 札幌市中央区北2西7
かでる2・7 (9F)
道立生涯学習推進センター内
011(271)2825

新しい変革の時代を迎えて



北海道公民館協会 会長 川 上 満

今年も師走を迎え、皆様方には何かとお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。

この一年間、当協会の役員はじめ会員市町村、道教育委員会、各大学、関係団体など、多くの皆様のご協力のもとに、予定していた事業が大きな成果をあげて終了できましたことに厚くお礼申し上げます。

さて、当協会の総会において首長部会を立ち上げて二年目を迎えました。平成二十八年七月に第一回の首長研修会を開催し、何事も始まりは小さいところから、当初五、六名からのスタートと考えておりました。が、いざ開催すると約三十三、四名の首長等が参加されました。第二回目標となる本年度は約六十四、五名の参加で、その内外から首長等も参加されるなど、確実に首長の意識が変わっていることを実感しております。

研修後、ご承認を得て、更なる充実を目指すため、五名の「首長部会の今後の在り方検討委員会」を立ち上げ、十月に第一回の協議がされたところであります。あと数回の議論を重ねながら慎重に纏めたいと思います。

いずれにしても公民館振興に理解ある首長等の輪を広げながら各市町村の持続可能な地域づくりの発展に取組んでいこうとするものです。

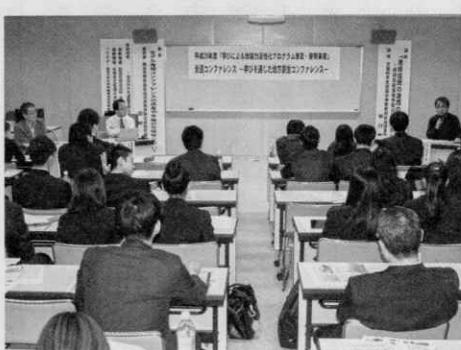


催し、高校生、大学生も多くの参加のもと、熟議された研修会となりました。

十一月三十日から十二月一日には全国公民館研究集会兵庫大会が八百名の参加のもとに開催され、全国公民館連合会の理事として、またパネリストとして参加させていただきましたが、全国の公民館協会への加入率も先細つていて中で北海道では市町村の加入も増え、尚且つ首長部会が立ち上がっていることに驚き、全国から大変に注目されているところです。公民館には、人をつなぎ、結ぶ力があります。

地域としっかりとつながっている公民館が元気であれば、その地域も元気になること考えられます。

今こそ公民館の存在感を高め、十年先、二十年先を見据えて地域の課題は地域で解決する自治の力を高め、「時代」を迎えていることを再認識した一年であります。結びに新しい年も皆様の限りないご発展とご活躍をお祈り申し上げまして挨拶といたします。



特に、地元の高校生も参加され、学校だけの学びだけでなく地域の学びを体験し積極的なご意見もいたただきました。これも釧路市をはじめ関係市町村、講師の方々、道教育委員会などのご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。

さらには、文部科学省委託事業として「学びによる地域活性化プログラム普及・啓発事業」を、オホーツク・文化交流センター並びに札幌において全道コンファレンスとして開

社会教育の灯台

公益社団法人全国公民館連合会

会長 石川正夫

北海道のみなさん

こんにちは！



十二月を迎えました。今年は釧路市で開催された「第三十九回全国公民館研究集会北海道大会」では大変お世話になりました。企画段階から開催地関係者の熱意は東京にまで轟いていましたが、当時はさらにパワーを感じました。そのため会場の熱意に応えるべく、あらかじめ用意していた挨拶文ではなくて、自らの言葉で会場のみなさまにご挨拶させていただきました。

また、特に印象的だったのが、多くの学生たちがとても熱心に参加している姿に触れて、長年教育行政に携わっていた身としても大変感銘を受けました。企画、運営に携わった多くの関係者のみなさまにお礼を申します。ありがとうございます。

さて、文部科学省では「総合教育政策局」を設置し、「社会教育課」を廃し、大規模な組織改編を計画し

ています。当初はほとんど説明がなっていました。これまで、「社会教育から生涯学習」という言葉がひとり歩きとの再来かと多くの関係者が大きくな不安要素として危機感を抱きました。

本連合会はもちろんのこと、北海道公民館協会、長野県公民館運営協議会、日本社会教育学会、各自治体等から多くの要望が出されているところです。その結果、「社会教育振興官」配置の明示など社会教育振興の体制整備に配慮がされるようになりました。文部科学省からも新しい課を束ねて社会教育を力強く推進していく官職になるので安心して欲しいとの説明がありました。現段階では組織の名称は「仮称」とされています。誰もが、ひと目見るだけで文部科学省が推進する社会教育の姿がわかるような体制整備を切に希望します。

一、計画発効後、個別具体的な社会教育施策達成目標を定めることに対する記述を明記

二、各省庁で計画された社会教育推進に資する施策の適切な関連付けと情報提供の推進を明記

三、耐震化等の施設整備の具体的な目標と国の責務の明記

年々瀕を迎え、何かといそがしくなります。どうか体をご自愛いただき、よいお年をお迎えください。

四、住民に教育的アプローチをする職員の質的保障と研修機会の充実の明記

五、社会教育主事養成の見直しによる「社会教育士」の称号を付与することの明記

(第四十回全国公民館研究集会の概要は、本連合会ホームページにパンフレットを掲載しています)

自治体で教育計画を策定するにあたり、その内容を参照するためには、最も重要な課題として毎年教育達成目標の具体的な項目を示す必要があると考えます。そのことを踏まえ、次の六項目について健全な地域社会の発展に資する社会教育の具体的な施策を明示していただくようお願いしているところです。

から二日間で「第四十回全国公民館研究集会」が、テーマを「公民館がひらく日本の未来～地域性・個別性を活かした新しい公民館活動を！」と題し、東京の日本青年館ホールで池上彰さんをお迎えして開催します。生涯学習社会において、社会教育に課せられた使命はとても重いものがあります。生涯学習の理念の実現は社会教育の盛衰によって大きく左右されるものであり、社会教育なくして生涯学習社会の実現はありません。現在の社会は先人たちの努力の積み重ねで築かれてきました。これから社会は現存する我々が創り上げていかなくてはなりません。そこに大きく寄与する社会教育が、全国津々浦々で力強く推進されるために、本大会へのみなさまのご参加を心よりお待ちしています。

社会教育との出会い

北海道道議会

喜多龍一

グローバル社会が言われて久しい中、私は、我が国の英語教育が中学から教科としてきたにも関わらず会話力が身につかず、様々な分野での国際的交流・活動に立ち遅れていく懸念を持ってきました。

実際に道内でも観光で英語の基礎がもう少し出来ていれば地元の子を採用したい、逆に地元で働きたいが英語力がもう少しあれば、という声がきこえています。

国においても外交力の低下を懸念し対策が打ち出されました。

そうした中でNPO教育支援協会北海道と知り合い、小学校英語活動の重要性を認識し、活動をしていく過程で一九九九年に日本で初のNPOとして活動を始めたNPO教育支援協会代表理事吉田博彦氏と出会いました。

この出会いは、私の議員活動の一転機となりました。その間文科省の審議会から小学校英語の領域での導入が答申され、二〇一年からは小学校五年で英語活動が必修化、二〇二〇年度の小

学校の次期学習指導要領の全面実施に向け、十八年度から二年間移行措置を導入するなど、ここ十年で我が国の英語教育も大きく前向きに変貌を遂げようとしています。

また、二〇〇五年いじめが原因で遺言を残し教室で首吊り自殺した滝川市小六女児の事案について、滝川市教育委員会の遺書ではなく「手紙」であるとのマスコミに対する回答や、いじめはなかたとする調査結果など大きな社会問題となり、その影響は全国の子ども達に波及しました。

当時の文教委員長として、道教委とともにこの事案に真正面から取り組み、その時に生まれた「すべては子ども達のため」という合い言葉は、今も道教委の中で息づいています。

しかし、今もなおいじめ根絶への道は険しく、いじめが潜在し不登校や自殺が絶えない現状にあり、学力向上などを含め開かれた学校づくり、コミュニケーションスクール化の取り組みがますます求められています。学校・家庭・地域が、しっかりと協力

連携しあって、未来を担う子ども達を育む土台作りに、これまで以上に取り組んでいかなければなりません。今、振り返って見てこうしたことから、社会教育との出会いの下地となつた

のだとおもいます。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災による福島県第一原発事故の影響から、外での運動を規制されるなど不自由な生活を強いられている福島

の子ども達を守ろうと、吉田博彦氏らが、「ふくしまキッズ実行委員会」を立ち上げ、避難・保養を目的として、全国のNPO、行政関係、道教委、公民館関係者などの協力の下に、北海道をはじめ全国四十カ所超の地域に受け入れていただき、発災直後の二〇一一年夏から二〇一六夏までの五年間実施されました。私も支援員として少し関わせていただきました。当初目的の一時避難保養、自然と思いつ切り遊び・学から、この活動教育的効果に気づき、未来を担う人づくり、福島振興を担う人づくりといふことなどが意識されるようになりました。そうした取り組み過程を通じ、学校教育以外での学びの大切さ、意義の大きさを身をもつて感じたのがこの「ふくしまキッズ」

林間学校でした。

平成二十五年十月開催「第三十五回全国公民館研究集会inふらの北海道」を皮切りに各種コンファレンス等で学ぶ機会が増え、そして道内外多くの公民館関係及び自治体、文部省社会教育課長寺中作雄氏が著した

この件もあり地方創生を地域で担うのは人であり、その人づくりこそが社会教育の使命であるから、いよいよ地方創生と社会教育の連携・融合が重要な問題意識は道総合政策部と道教委との間で未だ入口段階だが少しづつ共有しはじめている感じがします。

私は戦後一年昭和二十一年に文部省社会教育課長寺中作雄氏が著した

平成29年12月25日

道公協広報(第127号)

「公民館の建設」の刊頭の「自序」で「この際本当に知恵を絞って再建を議さねばならない。——略——終戦後の混乱たる世相の中から、何とかせねばならぬとして起ち上がるうとする人々の……」と切々と地方分権の必要性と公民館の必要性を訴えています。

高度経済成長が終りを迎えるにつれ「地方の時代」という考えが広まり、昭和五十年代後半から国の行政改革に関する審議会でも「地方分権」の推進が明確に意識されるようになり平成五年六月衆参両院で憲政史上初めて「地方分権の推進に関する決議」が全会一致で採択、平成七年に「地方分権推進法」が制定されましたが、終戦直後に「地方分権」の旗が掲げられました。

今、私たちはここに、社会教育の原点に立ち返る必要があります。

私は教員、道市町村教育委員会及び首長部局を問わず社会教育主事の資格取得の受講を多くの有為な人達に受けたたどくのは、地域の先々にとり、意味ある事だと思います。

社会教育は地域の人々と混わって仕事をするのですから、きっと教育委員会でも首長部局でも行政職員として成長し、力をつけていく一つの

道だとおもいます。

市町村は社会教育主事を派遣してほしいと要請する。市町村は自らも養成することを期待し、社会主事派遣制度があるはずなのにそれはしない。こうした慣行を断ち切り、意識改革を促す勇気も道教委には必要ではないかと思います。

“財政厳しいから”と最初に言うのは良くありません。何をするのが良いか、財政厳しい中でそれをするにはどうしたら良いか、というアプローチを心がけるのが大事ではないかと思います。

今、文科省が平成三十年度予算編成に向け、機構・定員要求に現行の「生涯学習政策局」を「総合教育政策局」に再編するという要求をしています。



私たち北海道議会自民党会派の中に会としてではありませんが、社会教育や公民館とは何かを考える議員六名の勉強会を立ち上げました。どこに向かうか、続くのか現時点では予測不可能ですが、このメンバーの一人が平成二十九年第四定期道議会で社会教育について質疑を行いました。

巡らす昨今です。

行います。
内心期待しています。

“ローマの道も一歩から”です。



**平成二十九年全国公民館研究集会
北海道大会並びに
北海道公民館大会終了報告**

釧路市教育委員会生涯学習部
次長 宮 下 誠

一、はじめに

今年度の全国公民館研究集会並びに北海道大会を、十月十二日、十三日の二日間、釧路市で開催いたしました。兩日とも天候に恵まれ、北海道内はもとより、遠くは沖縄県から二十五名が参加されるなど、総勢二四名の参加者が素晴らしい講師の皆さんのもと、公民館活動に関する研鑽をつまれ、まずは盛会裏に終了することができました。

これもひとえに全国公民館連合会並びに北海道公民館協会の皆様、北海道教育庁や釧路教育局の皆様、さらには公民館活動に関係する多くの方々のご助言、ご協力のおかげであり、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

二、大会初日

大会初日の開会式では、ご多忙中にも関わらず文部科学省の神山修審議官様、北海道教育委員会の柴田達夫教育長様にご出席を賜り、公民館活動に対する貴重なお話をお聞かせいただき、冒頭から大いに盛り上がりました。その中で印象的だったのは、釧路市と大変関わりの深い柴田教育長様が「少子高齢化」にある今こそ、公民館を核としたネットワークづくり



三、大会二日目

二日目は、「住民自治」「防災」「人材育成」「コミュニケーション」といったパネルディスカッションへと進行していくましたが、特に吉田先生の歯切れの良い話ぶりは何回聞いても惚れ惚れとするものであり、話す内容は人前で話す機会が最近増えてきた私が最も印象的だったのは、釧路

が重要だとお話ししされていたことであり、これまで以上に公民館活動が注目されている事を改めて感じたところであります。

その後、文部科学省の丹野補佐様の行政説明、元文部科学省事務次官で現東京国立博物館の銭谷眞美館長様による基調講演が行われました。

銭谷館長様の温かい人柄が話す内容に満ち溢れ、その中でもやはり地方が生き抜いていくためには、公民館がしっかりと役割を果たしていくことが大切だという内容は、公民館活動に携わる参加者の心に響いた事でしょう。

これが実際に実現するためには、参加された方々は皆さん満足そうな表情で、ひとまず目的は達成されたと感じております。

四、全体を通して

今年の大会は作年の早い時期から実施内容を確定し、機会を捉えて積極的にPRしたことが功を奏し、道内外から多くの方々にご参加いただきました。

幸いにも参加された方々からはお褒めの言葉を沢山いただき、大会開催までの苦労も報われたところです。

ただ、至らない点も数多くあつたと反省しております。この反省点も含め、大会開催準備の進め方を、次年度開催都市にはしっかりと引き継いでいきたいと思っております。

大会に関係された全ての皆様に重ねて感謝申し上げ、大会開催の報告といたします。

ました。

初日のプログラム終了後には、参加者相互の親睦を深めるため交流会を開催いたしました。これまでと全く趣きをえて、釧路市フィッシュセンター・マンズワーフMOOにある「屋台村」を会場に、十店舗それぞれで現東京国立博物館の銭谷眞美館長様による基調講演が行われました。

そこで、釧路産の魚介類などを見事に調理し、それを参加者はバイキング形式で食べるという内容でした。釧路市と根室市の地酒もふんだんに用意するなど、釧路地方の「食」を存分に堪能してもらおうとの想いでしたが、参加された方々は皆さん満足されましたと感じております。

その後、全体会を行って各分科会の内容を共有し、閉会式を行い全ての日程を滞りなく終える事ができました。その後、全体会を行って各分科会の内容を共有し、閉会式を行い全ての日程を滞りなく終える事ができました。

今年の大会は作年の早い時期から実施内容を確定し、機会を捉えて積極的にPRしたことが功を奏し、道内外から多くの方々にご参加いただきました。やはり事前の準備、そして周知することがいかに大切なことを実感したところであり、開催都市だけでなく、多くの関係者の皆様と連携して準備を進めることがいかに大事なことかを痛感した大会であります。

幸いにも参加された方々からはお褒めの言葉を沢山いただき、大会開催までの苦労も報われたところです。

二時間半という長丁場にも関わらず最後まで熱心な話会いが行われていました。特に、釧路市内の高校から参加した高校生が、これまでの大会にはない温かい雰囲気を作ってくれ、また、若者だからこそ発想を随所で述べてくれたことが、他の大人の参加者にも新鮮な刺激になつたようあります。

その後、全体会を行って各分科会の内容を共有し、閉会式を行い全ての日程を滞りなく終える事ができました。

その後、全体会を行って各分科会の内容を共有し、閉会式を行い全ての日程を滞りなく終える事ができました。

平成三十年度

北海道公民館大会の開催に向けて

名寄市教育委員会名寄市公民館

館長 仙石徳志

本年度の大会に参加して

十月十二日、十三日の二日間、釧路市で開催された「第六十一回北海道公民館大会」に参加し学びを深めるとともに、道内はもとより、遠くは沖縄県から参加された多くの皆様より今後の活動につながる良い刺激をいただきました。

本大会は「地方創生に向けた公民館の進むべきあり方」をテーマとし、社会の変化に対応した公民館の役割について様々な角度から学ぶことができたところですが、誌面の都合上、特に印象深かった言葉を一部紹介することで大会の空気を感じていただければと思います。「交流することと討論や交流を深めることができることで大会の空気を感じていただけます。」「アイディアが良いものかどうか見えてくる。高校生の視点と地域とのつながりがあつて初めて生まれるものもある。」「地方創生に向け、自分で決める力と多くの仲間をつくることのできる人材の育成が求められている。自分たちでなんとかする

ことが沢山あり、それが楽しい。人が組織と組織をつなげることが大事。」「スローライフは忙しい。やる困っている人の力になるだけ。」最後のコメントは、「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」を進めている株式会社M-easy戸田代表の言葉です。一部を紹介させていただきましたが、分科会での熟議を含め数多くの実践的なヒントをいただきました。

また、本大会では釧路市明輝高校の三年生や釧路市家庭防災推進員も多く参加されており、私は「地域防災力の向上と公民館の役割」をテーマとした分科会で防災推進員の皆様と討論や交流を深めることができました。また、「地域自治の形成と公民館の役割」をテーマとした分科会

■大会名
平成三十年度 第六十二回北海道公民館大会inなよろ

■テーマ
地方創生の実現を目指す公民館活動とは

（）公民館を核とした地域づくり
■開催日
平成三十年十月十一日（木）・十二日（金）

■会場
名寄市民文化センター
(名寄市西十三条南四丁目二番地)

■内容
基調講演、パネルディスカッション、分科会

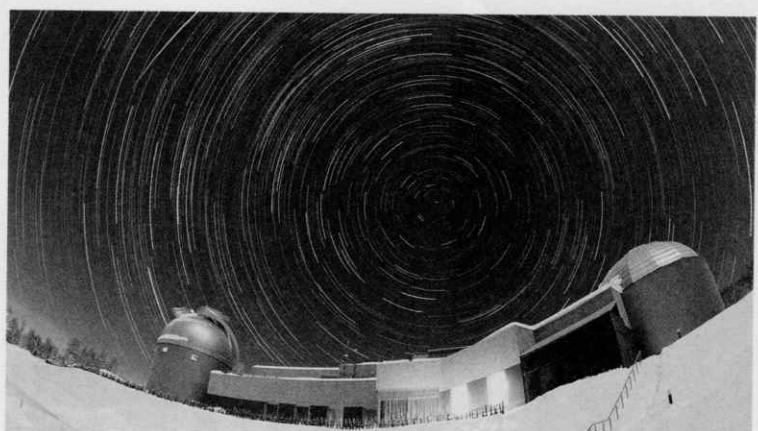
■参加者負担金 一人二千円

会場となる名寄市はもち米作付面

人材を育てることが地方創生につながっていく。」「公民館は地域の橋渡し役。住民に火をつけること、人と組織と組織をつなげることが大事。」「スローライフは忙しい。やる困っている人の力になるだけ。」最後のコメントは、「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」を進めている株式会社M-easy戸田代表の言葉です。一部を紹介させていただきましたが、分科会での熟議を含め数多くの実践的なヒントをいただきました。

来年度の大会につきましては現在、北海道公民館協会と上川支部が連携し、次のとおり準備を進めております。

平成三十年度の大会について

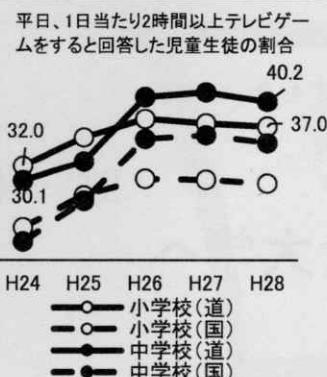


積日本一のまち、公開天文台としては日本で二番目の大きさの口径となる大型反射式望遠鏡を有する市立天文台きたすばるを中心とした星空観測のまちです。大会が開催される十月は美味しい秋野菜など、当地ならではの味覚もお楽しみいただけます。参加者全員が参加して良かったと感じていただけのよう、上川支部の加盟自治体相互の連携を図りながら準備・運営を進めてまいります。ぜひ多くの皆様にご参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

道教香通信

★地域ぐるみによる

家庭教育支援等の充実に向けて



近年、核家族化や少子化等の家族形態の変化、地域社会のつながりの希薄化などを背景に、子育ての悩みや不安を抱えたまま保護者が孤立してしまうなど、家庭における教育が困難な現状が指摘されています。また、子どもたちの豊かな心と健やかな体を育み、確かな学力を身につけてさせていくためには、まず望ましい生活習慣の定着が重要ですが、全国学力・学習状況調査の結果によりますと、家庭での学習が定着していないことや、テレビ等の視聴時間

が全国平均と比べて長いなど、十分に定着していない状況（左図参照）が見られます。そのため、道教委では、家庭教育の支援や子どもたちの望ましい生活習慣の定着に向けた取組を、市町村教育委員会や関係団体、企業等と連携を図りながら進めています。

一、地域人材による家庭教育支援

「学びカフェ」推進事業

この事業は、全ての保護者が家庭教育や子育てに関する学習・相談機会を日常的に得られるよう、各地域に保護者等の相互学習を促進する人材として「家庭教育ナビゲーター」を養成し、保護者が参加しやすい座談会形式等による学びの場（学びカフェ）を創出する取組を進めています。平成二十九年十一月現在、全道各地に一千百九十六名のナビゲーターを養成しています。

恵庭市では、家庭教育ナビゲーター養成講座に参加した方が「子

育てママたち
が気軽に話せ
る場をつくり
たい」と、自

わままっぷ」
実行委員会を



立ち上げ、家庭教育ナビゲーターが中心となつてお茶を飲みながら気軽に子育てについて語り合える「はびナビステーション」を実施しています。そのため、子どもたちの望ましい生活習慣の改善」をねらいとする事業を実施しており、本事業を活用して研修を行いました。子どもたちの実状を知り、子どもたちに体験活動の機会を提供することの重要性を学んだ

上で、安全確保や事業運営の流れについて学びました。地域住民が主体とする地域住民が、子どもたちの「望ましい生活習慣」を定着させるための取組を自ら企画・実施する「子ども・地域サポート事業」を道内の市町村教育委員会等と連携・協力しながら実施しています。

二、地域の力で

「望ましい生活習慣の定着」

生涯学習課では、保護者をはじめとする地域住民が、子どもたちの「望ましい生活習慣」を定着させるための取組を自ら企画・実施する「子ども・地域サポート事業」を道内の市町村教育委員会等と連携・協力しながら実施しています。

今年度は道内四十七市町村で実施（予定を含む）しています。上川管内では今年度六つの市町村で実施しており、鷹栖町では、通学合宿事業の充実のために本事業を活用しています。地域指導者向けの事前研修会では、通学合宿の運営者のほか、地域ボランティアも参加し、子どもたちの生活習慣に関する現状や、事業実施に際しての留意点等について学び、通学合宿を行う意義や支援の方法等について再確認しました。通学合宿事業後には事後研修会を行い、事業反省と併せて、次年度に向けての改善案等について話し合いました。

お知らせ

【課題対応型学習活性化セミナー】

開催日

平成三十一年一月二十六日（金）

開催場所

かどる2・7（道央）

【地域生涯学習活動実践交流セミナー】

開催日

平成三十一年二月十五日（木）

開催場所

（二月十六日（金）

かどる2・7

※お問い合わせは、北海道立生涯学習推進センターまで